

この3月末をもって、10年余り携わった創業支援施設のつから離れることになりました。盛岡市当局はじめ、関係各位の長きにわたる寛大な見守りに対し、心より感謝する次第です。

自分なりに振り返ると「事業者の邪魔をしない」と「押し付けず寄り添う」に一貫してこだわりました。事業支援なのに「邪魔

あくまでも支援の結果が、対象事業者にとってどうかに尽きます。

一方、事業活動の本質は、たとえば、それは「お客さまの要求を満たすこと」です。従って、事業者のもつばらのエネルギーは、お客さま、すなわち顧客活動にこそ向けられなければなりません。ところが、業績の振るわない事業者は、総じてトップの関心がそこに向

# いわての風

しない「や」押し付けず」とは？ 違和感を持つ方も多いでしょうから、ここから説明します。

事業の主役は事業者であり、決して支援する側でないことは明らかです。従って、ともすればパフォーマンス(示威行為)に傾きがちな支援活動自体への過剰な関心や評価はナンセンスです。

端的にいえば、へボな支援機関が、事業者にピント外れな活動を強要しているのです。その点では、事業者は被害者とい

いていません。しかも、その原因の一端がいわゆる支援側にあるのです。たとえば、支援組織の都合で煩雑な事務報告を求めたり、生産性の乏しい会合に招集をかけたたりするのは愚の骨頂で、事業活動の邪魔です。

事業者は被害者とい

## 事業支援のこだわり

えます。

これは、企業在籍時から薄々感じていました。が、前職の全真支援機関での業務経験で確信しました。それからは自分が事業経営者の皆さんに関わることで「顧客活動の邪魔をしない」よう、細心の注意を払いました。

一方、支援側には訳のわからない勘違いや「支援してあげる」という思い上がりがあり、へボほどそれが顕著なのです。そして、これは担当や機関の個別問題というより、わが国全体の思想的かつ構造的な欠陥に根ざしています。

つまり、わが国における経営論の多くは「内部管理」ありきの机上の空論で、事業経営で最も重要な「顧客活動」に関心が薄く、結果として経営に役立っていないということがその道の権威者が認めているのです。

構造的な欠陥について

なぜなら、事業者側には「借り」の気持ちがあり、不満や要望があっても、なかなか本音を訴え

一例ですが、経営学の権威である野中郁次郎氏が、自ら標榜したマネジ

終わりに、それぞれの末永い事業の繁栄を心から念じます。

ですから、事業者が「顧客活動」に集中できるよう、わが身を盾にして「邪魔立てさせない」サポートに徹する必要があるのです。

## 邪魔をせず寄り添う



関 洋一 一関市・企業世話人

せき・よついち 52年紫波町生まれ。東京理科大卒。商社勤務、誘致企業取締役、県中小企業支援センター・プロジェクトマネジャーなどを経て現在は中小企業大学校講師、岩手大学客員教授、盛岡市創業支援マネジャーなど。

は、官僚主義の抜本的な改革が求められて久しいので、ここでは紙幅の関係で触れません。

このように、ちまたには事業経営の支援どころか邪魔立て要素があふれているので、事業者はウカウカできません。